

口頭発表

動物を活用した活動における評価指標について：ウマの注視時間に関する検討

上角良太¹⁾・富田宏美¹⁾・土田あさみ^{1)*}・横山 直²⁾・木本直希²⁾

- 1) 東京農業大学農学部バイオセラピー学科
 2) 東京農業大学農学部バイオセラピーセンター

An evaluation index in activity using animals: Investigation about children's horse-gazing duration

UEKADO Ryota, TOMITA Hiromi, TSUCHIDA Asami*, YOKOYAMA Nao, KIMOTO Naoki

緒言

動物を活用した活動の評価は専ら受益者の効果についてなされている。しかし、動物を活用するとはいえ、人と人がかかわる活動であることから、活動者側の要素も活動の成果に大きくかかわると考えられる。そこで、活動において活動者を評価するための指標を得ることを目的に、小学生の飼育体験活動の映像データの分析を試みた。

対象と方法

対象：ウマの飼育体験活動に参加した厚木市在住の小学生児童26名（男子12名と女子14名）に関する映像を用いた。活動は平成24年10月から平成25年6月までの計8回で、抽出に利用した総映像時間は70分18秒であった。

抽出項目：評価のために映像データから抽出する指標として、児童がニンジンを与えられたときの、児童のウマを注視する時間（ニンジンを与えられた瞬間から、児童がウマから目を離すまでの時間）を「注視時間」として用いた。ウマへのニンジン給与という行為は、その目的が行為そのものではなくウマがおいしく食べられたか、あるいはウマがどのようにして食べるのかを児童が知ることであるとするもので、すなわち「注視時間」は、活動者の児童へのウマを理解してもらうためのはたらきかけ（声かけ）を反映する指標となる可能性を示唆する（動物介在教育・療法学雑誌 第4巻, 35-36, 2013）ことによる。

評価方法：「注視時間」を学年、性別、給餌条件（活動者の有無）、児童の活動に対する姿勢（活動者による個人評価点数）、さらにこれまでの活動の経過等に

ついて比較検討した。

なお、活動の撮影および研究への利用については保護者の同意を得た上で実施した。

結果

得られた注視時間は平均1.9秒（標準誤差（SE）0.3）で、低学年は平均1.24秒（SE 0.22）、高学年は2.3秒（SE 0.5）であった。注視時間には学年、男女、および活動中に特定の児童を担当した活動者がウマへのニンジン給与の際にかかわったかどうか等でそれぞれ比較したが有意な差は認められなかった。そこで、活動者による参加児童の活動中の集中力や注意したことが守られたかどうかの評価点数と「注視時間」との関連をみたところ、「注視時間」の長い児童（平均「注視時間」+2SE）は短い児童（平均「注視時間」-2SE）に比べて集中力評価点数が有意に高いことが示された（マンホイットニーU検定, $p < 0.05$, 図1）。さらに、活動ごとの平均「注視時間」をこれまでの活動経過で追ったところ、年間における活動開始時期や活動者構成に変化がみられた時期において「注視時間」が短くなるのではないかと考えられた（図2）。

考察

児童がウマにニンジンを与えられたときにウマを注視する「注視時間」は、学年、性別、給与時の活動者の有無等に影響されないが、活動中に集中力を示した児童では長くなることが明らかとなった。また、「注視時間」は、活動者にとって活動が久しぶりのときや活動者の構成に変化が起きたときなど活動ごとでの変動が大きいことが示された。このことから、「注視時間」が活動の評価指標になりうるかどうかは明らかになら

* 連絡先：a3tsuchi@nodai.ac.jp

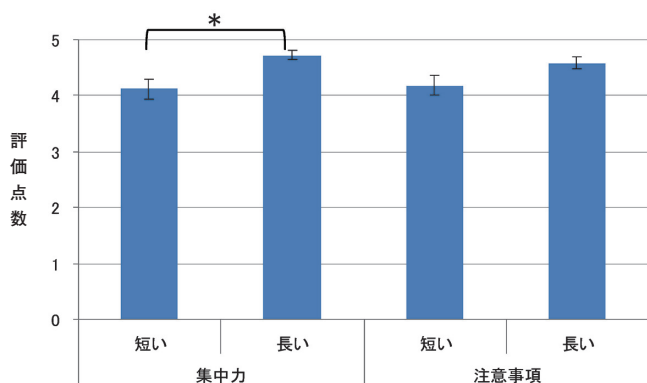


図1 注視時間の長さと児童の個人評価点数との関係
*p<0.05

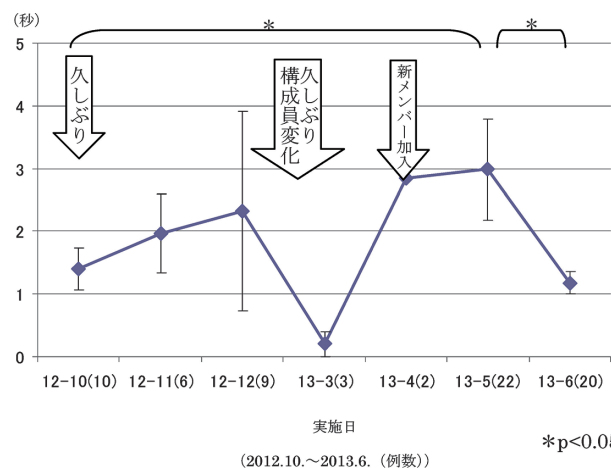


図2 活動ごとにみた注視時間の変化
*p<0.05

なかったが、活動は活動者の熟練度や構成に影響されることが示唆された。

今後の課題として、「注視時間」についての一層の検討，児童の活動評価方法の改善，他の評価指標の検討，等が挙げられた。